

ボンゴレⅡ世が異世界  
から来るそうですよ？

ラッキー10

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

家庭教師ヒットマンリボーンのボンゴレⅡ世（ボンゴレ・セコーンド）が箱庭の世界  
で大暴れするという物語です。

# 目次

YES！ ウサギが呼びました！

箱庭来る！



# YES！ ウサギが呼びました！

## 箱庭来る！

「ボス、ここ最近トマゾフアミリーの2代目と本気の殺し合いをしてから特に目立った敵がいませんね。これからどうします？」

「今それを考へている途中だから下がれ！」

セコーンドにそう言われて下がる嵐の守護者だつた。

嵐の守護者が下がつてすぐに手紙が空から降つてきた。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。その才能《ギフト》を試すことを望むのならば、己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、我らの”箱庭”に来られたし？』

「ふ、面白そうだ！」

そうセコーンドが言い終わると同時にセコーンドは消えた。

セコーンドのほかにも三人いて高度一万メートル以上の所からダイブ中でセコーンドだけがこの状況を楽しんでいた。

セコーンドを含んだ四人全員が湖に落ちていく。

「し、信じられないわ！まさか問答無用で引きずり込んだ挙句落とされるなんて！」

「右に同じだクソツタレ。まだ石の中に召喚された方がましだぜ」

「お前も俺と一緒に少し変つてるな！」

「あなたたち、ずいぶん身勝手ね」

「ちょっとそここの二人聞いてる？私は久遠飛鳥よ、以後よろしく」

「それで、そこの猫を抱きかかえている貴方は？」

「……春日部耀。以下同文」

「それで野蛮で凶暴そうなそこの貴方は？」

「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快楽主義と三拍子そろつた駄目人間なので、用法と用量を守つた上で適切な態度で接してくれお嬢様」

「そう。取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」

「ハハ、マジかよ。今度作つとくから覚悟しひけ、お嬢様」

思いがけない飛鳥の対応に十六夜は心からケラケラ笑っている。

「それであなたたち二人は？」

「俺はヴァン【ボンゴレⅡ世（セコーンド）】だ」

女子、二人の第一印象は最悪だった。

十六夜はこいつと戦つたらおもしろそうだという事だつた。

「そこに隠れているやつそろそろ出てこいよ。

ここにいる四人全員気づいているんだからおとなしく出てきた方が身のためだぞ！」

ヴァンが殺氣を少し含めながら言い放つた。

ヴァンにはジョットほどではないけど“ブラツドオブボンゴレ”、見透かす力、またの名を超直感があるから気付いて当然だかほかの三人は意外そうにしている。

「へえ、以外ねあなたも気づいていたんだ」

「俺も当然ながら気づいていたぜ。その猫を抱きかかえているお前も気づいていたんだろ」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

いろいろとみんなが喋っているとウサミミをつけている女性がおずおずと出てくる。

「や、やだなあ、そんな怖い顔で見られると黒ウサギ死んじやいますよ」

「なにあれ？」

「コスプレ？」

飛鳥と耀は黒ウサギのウサミミはコスプレだと思ったようだが、それも当然の反応であろう。

「違います、黒ウサギはコスプレなどでは——!?」

「えい」

「フギヤ！」

耀が興味本位で黒ウサギのウサミミを力いっぱい引っ張る。

「ちょ、ちょっとお待ちを！触るまでなら黙つて受け入れますが、初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、どういう了見ですか!?？」

「好奇心の為せる業」

「自由にも程があります！」

「へえ？このウサ耳って本物なのか？」

「じやあ私も」

「ちょ、ちょつと待————！」

黒ウサギは十六夜、飛鳥、耀、三人の問題児たちの行動に言葉にならないような悲鳴を上げながらヴァンに目で助けを求めようとしたがヴァンは興味がないという感じだつたから黒ウサギは将来のこと思いやる。

「——あ、あり得ないのですよ、学級崩壊とはきっとこのような状況を言うに間違いないのデス」

「ようこそ、”箱庭の世界”へ！ 我々は貴方がたにギフトを与えられた者達だけが

参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていただこうかと思いまして、この世界にご招待いたしました！」

「ギフトゲームつてなんだ!?」

セコーンドが珍しく口を開いた。

「その前に皆様は既にお気づきかもしだせんが、貴方がたは皆、普通の人間ではありません！皆様の持つその特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその恩恵を駆使して、あるいは賭けて競いあうゲームのこと。この箱庭の世界はその為のステージとして造られたものなのですよ！」

「恩恵——つまり自分の力を賭けなければいけないの？」

飛鳥が黒ウサギに質問した。

当然のことながらヴァンも気になっていた。

「そそうとは限りません。ゲームのチップは様々です。ギフト、金品、土地、利権、名譽、人間。賭けるチップの価値が高ければ高いほど、得られる賞品の価値も高くなるというものです。ですが当然、賞品を手に入れるためには”主催者（ホスト）”の提示した条件をクリアし、ゲームに勝利しなければなりません

ヴァンが主催者（ホスト）つてなんだ!?と聞こうとしたら耀が質問した。

「……」主権者（ホスト）“つて何？”

「様々ですね。暇を持て余した修羅神仏から、商店街のご主人まで。それに合わせてゲームのレベルも、命懸けの凶悪、難解なものから福引き的なものまで、多種多様に揃っているのでござりますよ！」

「皆様は召喚されたばかりですので場所をここから変えてそこでゆっくり続きを話しましよう」

「黒ウサギ、お前何か隠しているだろ!?」

ヴァンが黒ウサギに殺氣を含んだ言葉で聞いた。

誰が見ても、黒ウサギは少しあせつているようだ。

「はい。この世界にはコミュニティというものが存在します。この世界の住人は必ずどこかのコミュニティに所属しなければなりません。いえ、所属しなければ生きていくことさえ困難と言つても過言ではないのです！私たちのコミュニティは東区画でも最大手のコミュニティだったのですが、3年前にギフトゲームで敗北したことでコミュニティを存続させるのに必要な人もコミュニティの名も旗も奪われ”ノーネーム”となってしまったのです。ですから皆様にお力添えをと思っていたのですが……」

「俺も弱い組織を一から立て直す手伝いをしてやるよ」  
「わたしもいいよ」

「わたしはこの世界に友達を作りに来ただけだから……」

飛鳥が耀の友達第一号に立候補しているときに十六夜はまったく別のことを考えていた。

「おい黒ウサギ、この世界は面白いか？面白いなら入つてやる」

「Y e s！『ギフトゲーム』は人を超えたものたちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギは保証いたします♪」

黒ウサギはかなりうれいそうに答えた。

「ジン坊っちゃん——！新しい人達を連れてきました！」

黒ウサギがかなり嬉しそうに帰ってきたのを見てジンは内心ほつとした。

「お帰り、黒ウサギ。そちらの女性二人が？」

「そうです。こちらの御五人様がつてえ？」

後ろを振り向くとヴァンに十六夜がいなかつた。

「…………え？…………あれ？確かに、もう二人居ませんでしたつけ？ちょっと目付きが悪くて、口が悪くて、全身から、俺、問題児!!」という殿方と俺、最強!!という感じの殿方が「ああ、十六夜君とヴァン君のこと？十六夜君なら『ちよつと世界の果てを見てくるぜ！』とか言つて駆け出して行つたわ、あっちのほうに。」

飛鳥が指をさした方は強力なギフトを持つ幻獣がたくさんいるところだつた。

黒ウサギは呆然としているが飛鳥と耀を問いただした。

「どうして止めてくれなかつたのですか!!」

「『止めてくれるなよ』と言われたもの。」

「じゃあ、どうして黒ウサギに教えてくれなかつたのですか!!」

『黒ウサギには言うなよ』って言われたから。』

「嘘です！絶対嘘です！実は面倒だつただけでしようお二人様！」

「うん。」

黒ウサギは愕然となつた。黒ウサギがほかの二人のことを聞こうとしたら飛鳥がヴァン君ならどこに行つたか知らないけどといつたからさらに愕然となる黒ウサギ。

そんなやり取りをしているとジンの顔色が次第に悪くなつていつた。

「た、大変です。世界の果てには、ギフトゲーム"ねため野放しにされている幻獣が。」

「幻獣？」

「は、はい。ギフトを持った獣のことを指す言葉で、特に、世界の果て”付近には強いギフトを持つた幻獣がいます。出くわせば最後、とても人間では太刀打ちできません！」

「あら、それは残念。十六夜君達はもうゲームオーバー？」

「ゲーム参加前にゲームオーバー……斬新？」

「冗談を言つている場合ではありません！」

ジンは飛鳥たちがこのことの重大さが何もわかつていないので怒っていた。

はあ……ジン坊っちゃん、申し訳ありませんが、お二人の案内を任せてもよろしいですか？」

「分かった。黒ウサギはどうする？」

「問題児達を捕まえに参ります。事のついでに――、箱庭の貴族”と謳われるこのウサギを馬鹿にしたこと、骨の髓まで後悔させてやります！」

黒ウサギから何やらオーラが出てきたと思つたら黒ウサギの髪の色が桃色っぽい色に変わつた。

「一刻ほどでもどります！皆様はそれまでゆつくりと箱庭ライフをご堪能くださいませ！」

黒ウサギは世界の果てのほうに跳んでいった。

黒ウサギの速さに少し驚いている飛鳥と耀だつたけどすぐに飛鳥が口を開いた。

「……。箱庭のウサギはあんなに速く跳べるのね。素直に感心するわ。」

「ウサギ達は箱庭の創始者の眷属。力もそうですが、様々なギフトの他に特殊な権限を持ち合わせている貴種です。彼女なら余程の幻獣と出くわさない限り大丈夫だとうのですが……」

ジンは心配そうに黒ウサギが飛んでいった方を見ていた。

そのころ十六夜は世界の果てにいて、水神とギフトゲームをしている最中。

ヴァンは十六夜とは全く別の場所である溶岩地帯にて、炎神とギフトゲームをしている最中。

十六夜 side

『まだ……まだ試練は終わっていないぞ、小僧共オ！』

水中から出てきた巨大な蛇が十六夜に対してからり怒りがしんとうしている様子。

水中から出てきた巨大な蛇は角も生えているから龍にも見えない。

「十六夜さん何をしているのですか？速くコミュ二ティに戻りますよ」

「なんか偉そうに『試練を選べ』とかなんとか、上から目線で素敵なこと言つてくれたからよ。俺を試せるのか試させてもらつたのさ。結果は、まあ残念なヤツだつたけどな」

『心意気は買つてやる。それに免じ、この一撃を凌げば貴様の勝利を認めてやる』

「寝言は寝て言え。決闘は勝者が決まって終わるんじゃない。敗者を決めて終わるんだよ」

十六夜は目の前にいる巨大な蛇にどうやら喧嘩を売つたらしい。

『フン——その戯言が貴様の最期だ！』

巨大な蛇が言い終わると同時に竜巻がどんどん肥大化していき十六夜に襲いかかる。不用意に竜巻に近づいたら身体がバラバラになるくらいの威力がある。

「——ハツ——しゃらくせえ！」

十六夜にとつては自分に襲い掛かつてきただ竜巻はたいしたことがなく拳の一撃で消してしまつた。

そのまま十六夜が巨大な蛇の顔に一撃をいれて、十六夜の初めてのギフトゲームは十六夜の完全勝利で終わつた。

黒ウサギが気絶している水神のもとに駆け寄つて大きな水樹の苗をもらえたと大喜びで十六夜の所に来てヴァンがどこにいるか聞いてみたら溶岩地帯のほうを指で指したら黒ウサギの顔が蒼白になつていく。